

1	公開授業実施日時	平成30年11月22日 (木) (6時間目)14:30-15:20
2	場所	LL教室
3	対象	1年3組 (40名)
4	授業者	佐古孝義 (英語) 境倫代 (英語) 川井亮 (国語) ※岡本幹 (課題研究・オブザーバー)
5	島名	イシュー
6	単元名	和歌を英語で組み立てなおそう
7	関連する教科・領域	国語・英語
8	単元の目標・ねらい	目標・ねらい：国語で学習した和歌の中から、各グループで1つを選び、その歌の背景や心情を解釈した後、英語で短歌（短詩）として表現し直したものを、全員で鑑賞・検討し、日英の表現の仕方、物事の捉え方の差異について理解を深める。
9	グローバル・スタディーズとしての目標・ねらい	<p>目標・ねらい：オリジナルの和歌とその背景や心情を解釈して、英語で再構成（脱構築）した作品との間に見られる差異を通して、日本（人）のものの捉え方や世界観を別の角度から考え直し、よりグローバルな視点でそれを相対化することが可能になる。</p> <p>（以下に当てはまるものがあれば、□を■にしてください）</p> <p><input type="checkbox"/>グローバル社会に見られる課題を知る。</p> <p><input type="checkbox"/>社会的な課題に対するさまざまな捉え方があることを理解することができる。</p> <p><input type="checkbox"/>世界の人々とともに生きていくための課題の解決に自分がどのように関わるかを考えることができる。</p> <p><input checked="" type="checkbox"/>日本語や外国語によるコミュニケーションを通して、クラスの仲間と関係を構築することができる。</p>
10	単元の評価規準【教科・領域として】	和歌の正確な解釈とともに、既習の英文法知識の整理とその実践的活用がなされているかをできた作品を元に評価する。
11	単元の評価規準【グローバル・スタディーズとして】	それぞれのグループの作品を鑑賞し、疑問点や改善点を指摘しあう中で、日英の表現の仕方、物事の捉え方の差異について理解し、日本（人）的な世界観を相対化できたかを、授業への参加度、まとめプリントなどで総合的に評価する。

12 単元計画	<p>(第1時～第6時)</p> <p>生徒は4人1グループで和歌をひとつ選び、それを現代語に訳し、そこに表現されている情景や心情を読み取る。その後、「誰に向けて」その和歌を訳すのかを考え、既習の英文法知識を実践的に活かして翻訳 (Writing) し、自分たちの意図が伝わるように他のグループに読み聞かせる (Speaking)。他のグループの訳した和歌を、聞く (Listening) / 読む (Reading) ことによってお互いに評価をしあう。</p>
13 本時の目標	<p>(第7時：公開授業)</p> <p>前時までの活動を受けて、評価されたグループの英訳の意図と、評価したグループの評価の観点を確認しあう機会を設ける。また、複数の教科の教員や留学生からの作品に対する感想を聞くことにより、英訳の意図・手法がその作品の英訳をするにあたって妥当であったか、何が問題点であったかななどを議論する。</p>
14 本時の展開	別紙指導案を参照
15 グローバル・スタ ディーズとしての特徴	<p>1) 解釈の多様性と2) 表現形式の妥当性について、「早まることなく、細部にも関わって、複数の視点で、吟味し、問い、よく考える」クリティカルな思考実践である。</p>
16 授業者から一言	<p>生徒のみならず、まず教員同士で、この課題設定をどう捉えるべきか、そこに示されるべき狙いは何かなどについて真剣に議論を重ねた。生徒同士、教員同士、教員と生徒の対話の中で、我々授業者自身が課題研究の全体像を掴み、積み上げていった実践であり、他に類を見ない実践例となっていると自負する。</p>

クリティカル・シンカーを育てたい

～教科横断型「課題研究」で取り組む「主体的・対話的で深い学び」の実践～

京都教育大学附属高等学校

英語科 佐古 孝義／理科 岡本 幹

英語科 境 倫代／国語科 川井 亮

キーワード:教科横断／課題研究／主体的・対話的で深い学び／クリティカル・シンキング

0. はじめに

「クリティカル・シンキング（以下、CTと略記する）」という言葉が教育現場を賑わせているようになって久しい。CTについては、それを一種のビジネススキルのように捉えるものから、心理学をベースとするもの、また哲学（より狭義には形式論理学など）を土台とするものまで、その語の指す概念は多岐にわたっている。例えば伊勢田哲治（2005）は、CTを「修理型」と「改築型」の二つに大別し、哲学的CTは主に後者を扱うものであると整理している。道田泰司（2012）は、さらに細かく「ビジネス系／論理学系／心理学系／哲学系／教育系／専門系」と分類し、それぞれに詳細な検討を施している。私自身は、菊地建至（2015）に倣って英語教育の中で目指すべきCTを「早まることなく、細部にも関わって、複数の視点で、吟味し、問い、よく考える」知的な営みを指すものと（暫定的に）定義している。ではこのCTは、次期学習指導要領が目指す方向性と果たしてどのような関わりを持つだろうか？

新学習指導要領の総則には、改訂の基本方針として「各学校においては、教科等の目標や内容を見通し、特に学習の基盤となる資質・能力（言語能力、情報活用能力（情報モラルを含む。以下同じ。）、問題発見・解決能力等）や現代的な諸課題に対応して求められ

る資質・能力の育成のために教科等横断的な学習を充実することや、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して行うことが求められる。」とある。

では、ここにある「現代的な諸課題」とは何か？それに対応して求められる「資質・能力」とは具体的にどのような能力なのか？なぜ「教科横断的な学習」の充実が求められるのか？こうした問いに対する答えになることを企図して、本稿では、CTを生徒が実際に駆使しながら協働学習を進めてゆくことを意図した実践を、「主体的・対話的で深い学び」の一つの例として紹介したいと思う。

以下に示す授業は「国語の教科書に登場する和歌を英語に訳そう」をテーマとした「課題研究」であり、京都教育大学と附属高等学校が共同して研究開発を行っているグローバル・スタディーズの実践例の一つである。

1. 課題設定の背景・意図

課題研究とは、「先人たちが行った研究の諸業績をふまえたうえで、社会・学術の諸問題から自分が取り組むべき課題を見出し、それに対して、客観的なデータをもとにしつつ、自分自身の考察やアイデア等で新たな知見を想像、探求し、他者と共有することで、課題解決に貢献すること」と説明される。通常、課題研究とは、以下のように段階的に行われるものである。

STEP 1 課題から研究テーマを決める

STEP 2 リサーチクエスチョンを決める

STEP 3 仮説を立てる

STEP 4 研究手法を学び、研究の計画を立てる

STEP 5 調査・実験を実施する

STEP 6 結果をまとめ、考察する

STEP 7 課題研究で得られた知見を他者と共有する

課題研究には、そもそも論として、研究の背景に「何かある事象・現象が気になる」といった素朴な疑問や感情があるはずである。今回、本校での「課題研究」の授業の題材を考えるにあたっての我々授業者の疑問の端緒は、「国語で『和歌』を学習する現代的な意味」を問い直すことにあった。古典作品、とりわけ「和歌」を学ぶことで、(学習指導要領にあるところの)「現代的な諸課題」の解決にどのような貢献を果たすことができるのか。そこを切り結ぶ「線」を明らかにしてみたい。それは自ずと「教科横断・合教科的な学習」を必要とするだろう。加えて、上記の STEP の先にある「評価」の問題についてもさらに考察を深めてみたい。このような問題意識のもとで、今回の授業を構想した。

2. 指導計画 (全 8 時間程度)

(第 1 時～第 6 時)

生徒は 4 人 1 グループで和歌をひとつ選び、それを現代語に訳し、そこに表現されている情景や心情を読み取る。その後、「誰に向けて」その和歌を訳すのかを考え、既習の英文法知識を実践的に活かして翻訳 (Writing) し、自分たちの意図が伝わるように他のグループに読み聞かせる (Speaking)。他のグループの訳した和歌を、聞く (Listening) / 読む (Reading) ことによってお互いに評価をしあう。

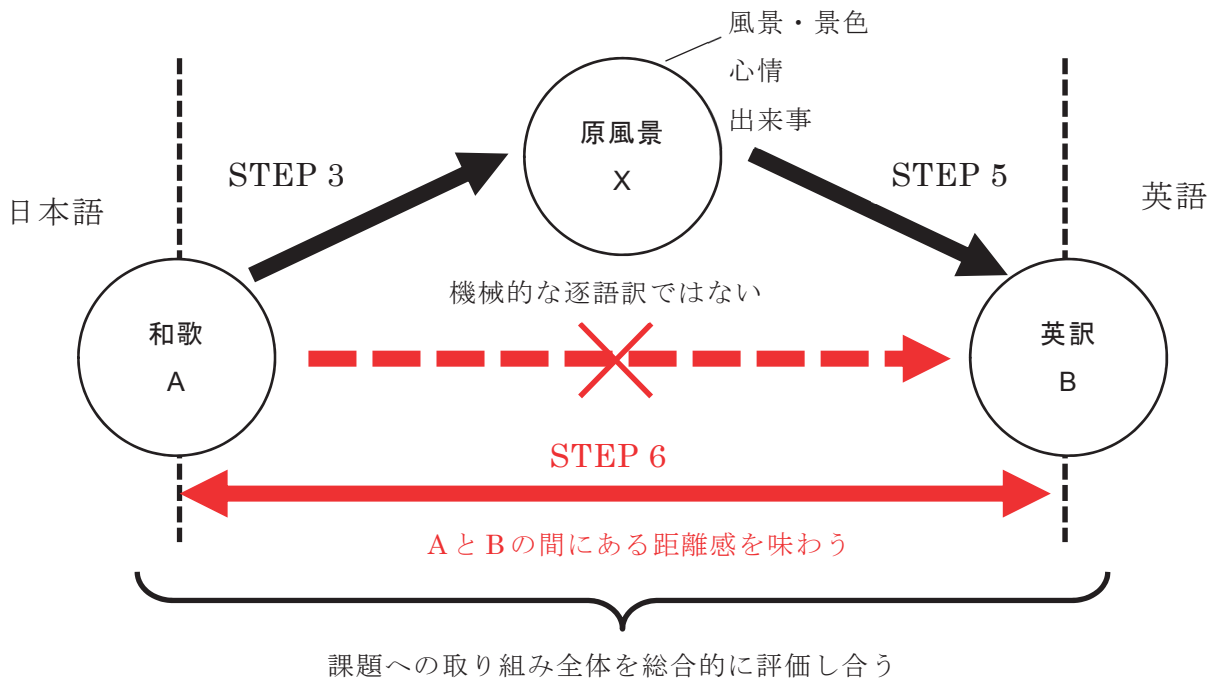
(第 7 時 : 公開授業)

前時までの活動を受けて、評価されたグループの英訳の意図と、評価したグループの評価の観点を確認しあう機会を設ける。また、複数の教科の教員や留学生からの作品に対する感想を聞くことにより、英訳の意図・手法がその作品の英訳をするにあたって妥当であったか、何が問題点であったかなどを議論する。

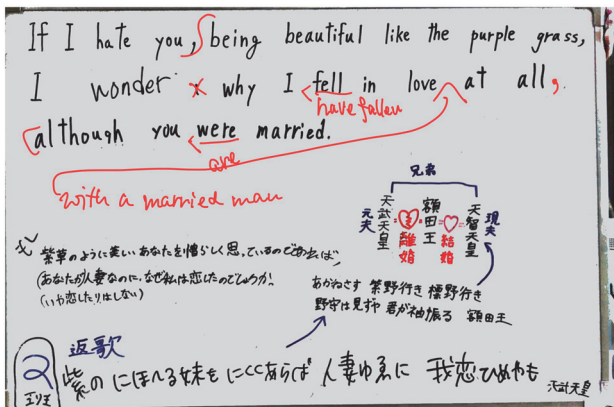
第 1 時からの活動を先の課題研究のステップに当てはめて整理すると、以下ようになる。

STEP	内容	具体的な活動
STEP 1	課題から研究テーマを決める	教科書に載っている和歌の中から、グループで一つ選ぶ (和歌 A)。
STEP 2	リサーチクエスチョンを決める	その和歌を解釈するために必要な古典文法・古文常識の知識を整理し、その歌の解釈にあたってポイントとなる箇所を特定する。
STEP 3	仮説を立てる	自分たちで和歌を (解釈) する。その際に、歌の「原風景 (X)」を考える。 (誰が誰に向けて / どのような出来事について / どのような心情で歌ったものか?)
STEP 4	研究手法を学び、研究の計画を立てる	その歌を英語に訳すにあたって、どのような点が難しいかを検討する。英語と日本語の表現の仕方、物事の捉え方の差異について理解を深める。
STEP 5	調査・実験を実施する	これまでに習った英文法の知識を使って、英語に (翻訳) する (英訳 B)。 その際、「誰に向けて / どのような目的で」英訳するのかという視点を意識する。 できた作品を英語科の教員や ALT にチェックしてもらい、修正する。
STEP 6	結果をまとめ、考察する	国語科、英語科の教員などによるフィードバックを経て、これまでの活動をまとめる。
STEP 7	課題研究で得られた知見を他者と共有する	自分たちの意図が伝わるように、英訳を他のグループに読み聞かせ、お互いに鑑賞・批評する。

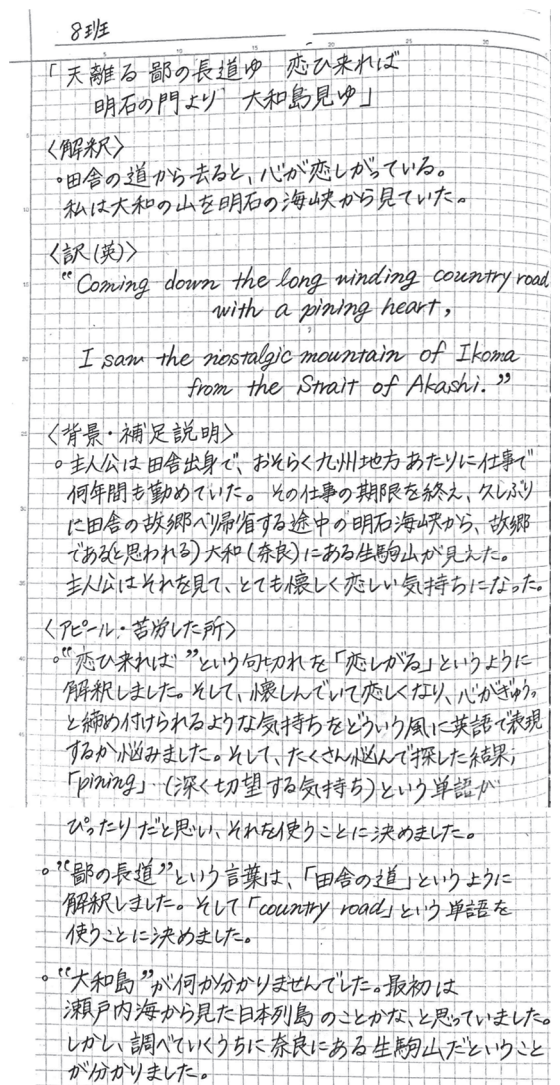
生徒には以下のように図式的に説明を行った。



▼ホワイトボードにアイデアを書きながら推敲し、できた作品を「研究ノート」にまとめた〈資料①〉



▼班に一冊の「研究ノート」でのまとめ (抜粋) 〈資料②〉



▼公開授業前の1時間で、全グループの作品を一度全員が読み、感想を一人ひとりカードに書かせて、各班にフィードバックさせた。〈資料③〉

5 班	1	2	3	4	5
<p>納得したところ 工夫がされているところ - 最初の日から一人ひとりに「was」になっていたの、第5まで読んだ時に主人公二人の書き出しと分かったの、良いと思いました。</p>					
<p>今ひとつわからないところ 疑問点 改善点 質問 何故、最初の日、というふうに英語にしたのですか？ 英語に「空」に並ぶ単語は他にないので、と思いました。</p>					

この授業の前段階として、「俳句」を取り上げてその英訳を試みた。その際に、英語の詩 verse に見られる表現技法のいくつか（比喻（直喩と暗喩の違い）や脚韻など）も合わせて解説した。

3. 公開授業（2018年11月22日 SSH/SGH-A 発表会にて）の展開

過程	時間	指導内容	生徒の活動・応答	備考※
導入	5分	他のグループのそれぞれの評価を再確認し、自分のグループの作品を再度読み直す	作品を読み、自分たちの意図が伝わるような表現方法を考える	R S
展開		<ul style="list-style-type: none"> 特徴的なグループを1つ指名する 指名されたグループは、他のグループの評価を踏まえ作品を読む 他グループの評価を紹介し、評価したグループからのその意図を伝えさせる 他グループの評価について、作品作成の意図を説明する 授業参加者の教員、留学生からの評価を受ける 	<ul style="list-style-type: none"> 練習した表現で作品を読む その作品について、質問や感想を述べる 評価したグループが評価の意図を伝える (授業者が適宜質問を具体化する) 作品作成の意図を伝える。 (授業者が適宜質問を具体化する) 留学生からの評価が英語の場合は英語での表現を聞きとめる、必要に応じて書きとめる 修正点を述べるか、再度意図を説明する 可能なら、英語でのコメントを試みる 	S L W S
まとめ	5分	自己の作品の振り返りを行う	2グループのやり取りを受けて自己の作品の修正を行う	W

※4 技能のどれが中心的になる活動かを示す

(R:reading / L:listening / W:writing / S:speaking)

3-1. 授業の様子

①「思ひつつ 寝ればや人の 見えつらむ 夢と知りせば 覚めざらましを」(古今和歌集) を英訳した班を2つ取り上げる

同じ和歌を取り上げた2つの班を比較することで、

- 1) 解釈の多様性：〈解釈〉の違いを明確にする
- 2) 表現形式の妥当性：表現したい意図が、選択した表現形式で正しく伝わっているかを

明らかにする

ことを意図した。まずそれぞれの班の作品を単独で取り上げ、疑問点や感想・印象を他の班から指摘させ、それに対して返答する形で、作成した班から「和歌の解釈（現代語訳）、英訳した作品、工夫した点・アピールしたい点、苦勞した点など」を簡単に発表させた。

1班

I saw you in my dream.

Was it because I love you?

If I had known we couldn't stay together

I wouldn't have wanted to wake up.

[他の班からの疑問点や感想・印象]

- ・疑問文がうまく英訳に取り入れられていて分かりやすい
- ・love という直接的な表現が使われている
- ・理解が容易に出来、場面が想像しやすい

[1班の説明]

- ・英訳の意図は、今の人たちの当時の日本人の感情を分かりやすく伝えることだったので、なるべく平易な単語や文法を使って、和歌の意味が分かりやすく伝えることを心がけた。

4班

Thinking about him, I entered a dream.

There he appeared.

But, waking up, I realized

that he would not return anymore.

If I had known it was a dream

I would not have woken up.

[他の班からの疑問点や感想・印象]

- ・前半4行が、夢の中の話で「ぼんやり」とした印象を漂わせていることと、後半の2行がシンプルに表現されていることが対比的でよかった。
- ・Thinking ~と〈分詞構文〉で始めた意図は何か？
- ・There と冒頭にあるが、どこのことか？

[4班の説明]

- ・慕っている対象の「あの人」について具体的に描かないことで、読み手の想像力をかきたてようと工夫した。
- ・「眠る」という言葉を使わず、「夢の中に入る enter a dream」と表し、その夢の場所で there と繋いだ。
- ・分詞構文は学習したてだったので、使ってみたかった。

次に、1班と4班の作品を並べて、その差異を気づいた限り指摘させた。それぞれを単独に読んだときと、二つを並べて読み比べた時では、明らかに生徒たちが気づき、指摘する内容は質量ともに異なったものになった。

[他の班から指摘があった点]

- ・1班は慕う相手を you と表現しているのに対し、4班は he と表している
- ・1班は「(その人のことを) 思いつつ寝たので」と強い〈因果関係〉を示す because で表した。一方、4班では thinking と分詞構文を使い、接続関係を曖昧にしている
- ・後半の仮定内容で、1班は couldn't stay together (一緒にいられないならば) と表しているのに対して、4班は not return anymore (もう戻ってこない) と解釈し、If...it was a dream (もし夢だったら) とシンプルな仮定に留めている

[4班の補足説明]

- ・この和歌の主題はあくまで「夢」そのものにあるので、慕う相手について具体的に描写するのは避けた。

その後、国語の教員からは古典文法に則った品詞分析と解釈について、英語教員からは分詞構文や語順が生み出す効果について解説を施した。ここで取り上げたのは2つの班だが、どの班も聴衆の評価・感想を事前に受け取っている。自分たちの意図と聴衆の評価の差

を検証することで、2) 表現形式の妥当性を考えることになる。また、他の班の解釈と自分たちの解釈を比較することから、1) 解釈の多様性についても考察させた。

1班と4班を比較してみると、1班のほうが原歌(A)の現代語訳に忠実に訳したように見える一方、4班のほうが大胆な解釈と表現を用いているように感じられた(つまり上掲の図でいえば原歌(A)―英訳(B)間の距離が離れている感じがする)。

そこで、次には同様にこのA―B間の距離が感じられるような作品を取り上げて、全員で議論してみることにした。

②「春の園 紅にほふ 桃の花 下照る道に出で立つ娘(をとめ)」(万葉集)の英訳

今度は原歌を示さず、英訳作品のみを先に見せて、読み手がどのような情景を頭に描くかを考えさせた。

10班

Peach blossoms are shined bright red
by the sun.

The street is shined by the sun.

The young girl shines like the sun.

In the spring orchard.

[他の班からの疑問点や感想・印象]

- ・ by the sun / by the sun / like the sun と 曇み掛けるように韻が踏まれていて、詩の技法が効果的に使われている
- ・ Peach blossoms / The street / The young girl と焦点が当たってゆく主体(主語)が併置されていて、それが最終文で In the spring orchard に回収されるところが工夫されている
- ・ Peach blossoms / The street は物理的に「光っている(太陽に照らされている)」ので、受身形で書かれ、The young girl は物理的に発行しているのではなく、比

喩的な意味で「輝いている」ので、自動詞 shine と like the sun で表し分けているのが見事だ

当日の公開会場には、韓国から本学（京都教育大学）に来ている留学生も参観してくれていたもので、彼女たちにも感想を尋ねた。彼女たちも、Peach blossoms / The street と The young girl が無生物／生物の対比として効果的に示されていること、少女が太陽のように輝いている姿が思い浮かぶことなどを挙げて、英訳から感じられる印象を詳細に説明してくれた。このような評価・印象は、まさしく10班の生徒たちが意図したことそのものであり、狙いが奏功したことに対して、当該の生徒たちは勿論のこと、クラス全体が驚いた様子であった。

その上で、国語教員から〈解釈〉の正しさについて注意を促した。主に注意を促した点は、「詞書の部分の理解が適切であったか」という点と、「上代と現代の人々の、春を待つ感覚の相違点や共通点の吟味ができていたか」という点である。一つ目の「詞書」については「三月一日の暮に、春苑の桃李の花を・・・」という詞書の解釈が適切であったかということと指摘した。この和歌は「暮」に詠まれたのであって、決して朝や昼間に空に浮かぶ太陽のイメージを持つてはいけないということである。夕日によって「桃の花」が照らされ、一面に輝くほどの鮮やかな世界が想像され、それが英訳に反映されていたかを再考する必要があると伝えた。次に二つ目の「春を待つ感覚」であるが、これは文法面などの古典の知識というよりも、いにしえの世界を想像し、現代との相違点や共通点を比較し、それを通じて見えてくる当時の人々の心情に思いを寄せることが出来たかということと伝えた。

授業の最後に、1) 解釈の多様性と 2) 表現形式の妥当性のそれぞれについて、国語／英語の立場からまとめのコメントを付け加えた。

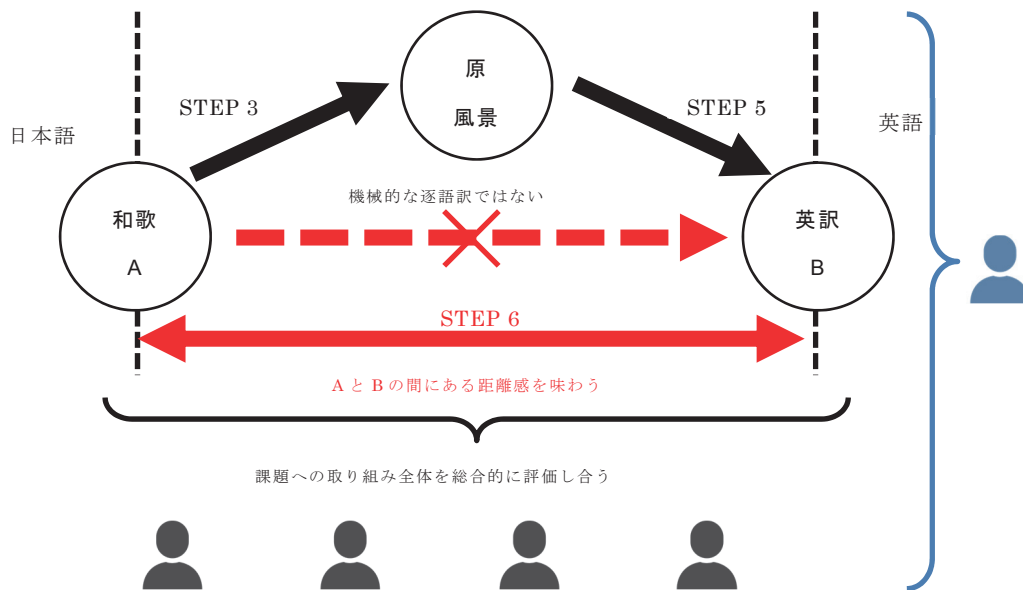
国語科からは、「〈解釈〉は人それぞれ、多様であっていい。ただし、その多様性や独創性といったものは、常に正しい知識（古典文法や古文常識、時代背景についての知識など）に立脚したものでなければ『ただのデタラメ』に過ぎないものになってしまう。つまり、〈解釈〉は一義的ではなく、多様性を許容しうるものであるが、様々な〈解釈〉の選択肢の中から『よりよいものとそうでないもの』を選別できる目を養う必要がある。そのために教科書で学ぶ知識が存在するのだ」という点が強調された。

一方、英語科からは、「和歌とは本来、自分の心情を歌い上げ、誰かに〈伝える〉ために意図されたもの。その和歌に込められた心情や風景を読み取り、自身の〈解釈〉を正しく相手に伝えようとする今回の試みは、〈コミュニケーション〉という言葉がまさに意味する場面そのものである。今回の課題研究を通して、学習したての文法事項を使ってみようとした子達もいたが、文法とは『伝えたいことを正しく正確に伝えるために』すなわち〈コミュニケーション〉のために存在している。文法を学ぶ意義とは、〈コミュニケーション〉をより妥当な形で成立させるためにある」という点を注意深く説明した。

▼その後（第8時）、教員、生徒ともに「評価シート」に記入し、各班にフィードバックを行なった。本学のアドバイザーからもコメントをもらい、生徒に還元した。〈資料④〉（9）班の作品

	努力しようぜ。	納得できないぜ。	理解できたぞ。	新たな発見ができたぞ。
和歌の解釈	きっちりとした解釈がなされていないかった。	解釈はなされているがわからないところが見られた。	よくわかる解釈がなされていた。	なるほどと思わせるような解釈がなされていた。
状況設定	状況設定はなされていないかった。	状況設定がなされているが、わからないところが見られた。	納得できる状況設定がなされていた。	新たな視点で状況設定がなされていた。
英訳	英訳のレベルまでいっていないかった。	英訳されていたが、間違いの箇所が見られた。	正しい英訳がなされていた。	語法、語順に工夫がなされていて、英語の見方が変わった。
全般的	和訳、状況設定、英訳がばらばらでもう少し努力してほしい。	和訳、状況設定、英訳が順にできていたが、納得できないところが見られた。	和訳、状況設定、英訳に整合性があり十分理解できるものになっていた。	和訳、状況設定、英訳を通して、和歌の新たな魅力が発見できた。

英訳の訂正と工夫が随分施されていて、面白く感じられた。和歌の解釈と英訳の両方にそれぞれ異なる英訳の視座が現れた。



3-2. 中間考察

生徒たちは、互いの作品を鑑賞し、批評しあうプロセスを経ることで、他者評価から今度は自己評価の段階、すなわち自分たちの意図と読み手の評価との間の差を検証し、「自分たちの作品の〈解釈〉は正しいものだったのか／自分たちの選択した表現形式（英語）は妥当なものだったのか」を自省する段階へと進むことになる。これは、課題研究の術語に即して言えば、「〈目的設定〉〈仮説〉〈方法論〉の妥当性の検証」（場合によっては、そこに〈仮説の再設定〉がふくまれることもある）というステップである。先の STEP 1～STEP 7 を総合的に俯瞰して振り返るこの STEP 8 は、自分たちの課題研究の取り組みそのものを検証するメタ認知的次元であり、他者評価から自己評価への移行において、学びの次数が一つ繰り上がっている。

この時果たして教室で生徒たちは一体何を行なっていると言えるのだろうか？先述のとおり、我々は CT を「早まることなく、細部にも関わって、複数の視点で、吟味し、問い、よく考える」知的な営みを指すものと定義し

た。とすれば、この取り組みはまさに CT の実践そのものに他ならない。CT とは一つの論件を巡って考えうる限り様々な側面からよく吟味する複層的な協働作業である。ここで改めて強調しておきたいのは、CT とは、論理的な探求や推論に関する〈知識〉とその運用の〈技術〉であると同時に、真理と問題解決を追求する「知的誠実さ」と、思考の柔軟性と他者の意見を尊重する「開かれた心」を持った〈態度〉を意味する、ということである（ゼックミスタ・ジョンソン(1996)）。CT において我々授業者が特に留意すべきことは、個々の能力よりはむしろ、主体的・対話的な学びを共有する場（環境）の整備である。

CT は、手元にあるテキストの平面的な理解から一歩進めて、他教科の学習内容を援用したり、自分でリサーチさせたり、その他の読解素材や参考文献に当たらせたり、自分で実際に試してみたり、そして何より自分が感じたことや考えたことを仲間と共有させる、という立体的な学習を試みることによって養われるものだと考えている。

さて、このような授業を通じて、果たして

CTの力は身についたのか、そしてそれを我々授業者はどのような形で評価する(べきな)のか。道田(2012)がいみじくも指摘する通り、CTは技能というよりは〈マインドセット〉であり、むしろ他者との、そして自分自身との〈対話〉という絶え間ない運動そのものを指すものである。こう考えると、我々授業者は、〈対話〉の外から生徒を傍観する存在ではなく、自分自身がその〈対話〉の運動に絶えず関わってゆく者であるべき／はずだ。今回の授業を通して、我々はまず教員同士で、この課題設定をどう捉えるべきか、そこに示されるべき狙いは何かなどについて真剣に議論を重ねた。むしろ、対話の中で、我々授業者自身が課題研究の全体像を掴んでいったと言う方が実情に即しているかもしれない。既成の問いと出来合いの答えが用意されているわけではない学びのあり方を考える中で、我々教員自身もまたCTの実践者であり、生徒と同じ学びの空間を生きているのだといえるかもしれない。

本稿のタイトルは、私自身が常に授業で心がけている理想である。「クリティカル・シンカーを育て『た』」でもなければ、「育て『方』」でもない。ただ、「クリティカル・シンカーを育てたい」さらに言えば自分自身が「クリティカル・シンカーでありたい」という願望のみが、本当の意味でCTの実践を駆動するのだといつも思っている。

参考文献

- ・伊勢田哲治(2005)『哲学思考トレーニング』筑摩書房
- ・菊地建(2015)「クリティカルシンキング入門は、何をする事なのか(1)」, 金沢医科大学教養論文集第43号, pp.29-49
- ・ゼックミスタ, E.B.・ジョンソン, J.E. (1996)『クリティカルシンキング《入門編》』(宮元博章ほか訳)北大路書房
- ・道田泰司(2012)『最強のクリティカルシンキング・マップーあなたに合った考え方をを見つけよう』日本経済新聞出版社